

講義題目 中央ユーラシアから見た世界史

歴史：特定の事象を①時間軸と②空間軸で捉える

- ① 過去現在未来を知り、考える
→ 偏重
- ② 多様性を理解する：今後、重要になる。

1. 中央ユーラシアとは——世界史の新しい見方

◇歴史：史資料に依拠して④人類の来し方をたどり、⑥現状がなぜ、どのようにして形づくられたのかを知り、③未来を考えることに資する分野

→特定の時間と空間の事象・事物を扱いながら、それを時間軸と空間軸の中で捉える営み（とりわけ世界史）：“ところ変われば品変わる”ということをも、筋道立てて理解

……〈異文化理解＝外国理解／自己省察＝自文化理解〉に必須：歴史を学ぶ効用！

＝④自らの来し方を知り（日本史）、他者の来し方も知る（世界史）……ファクトの知識に重点

⑥現在の世界の理解 ＋③これからの世界を考える基盤

↳伝統的な目的 ＝現在のルーツを知るため……西洋史・中国史偏重の傾向

近年と今後の傾向 ＝多様性の理解・知識と多元・多極的な世界理解

→ファクトの純増は不可避：イスラーム、東南アジア、アフリカ…

⇒《中央ユーラシア史》の世界：〈地域〉と〈方法〉と

◇世界をどうとらえるか ＝「アジア」というくくり

：「東洋・西洋」、「〇〇アジア」 →孤立的・単線的

：「各国史」＝世界史を個別史の総和として捉える見方：「世界史＞東洋史＞東アジア史＞中国史」

↓↑

《「各国史」的理解の問題点》

- ①世界史は各国史の総和ではない：歴史を「国家」によって分断
：現在「国」でないものを捨象
- ②国家の構成原理の転換：前近代の国家は支配者の財産
→近代に国民国家（nation-state）に転換
- ③「国家」の内実の重層性：組み合わせ・重なりは多様なはず

⇒〈地域〉からみる視点：可変的・重層的な枠組み

：地域社会・住民集団の固有性・自律性とその相互関係の重視

：観念的な通時的体系よりも、共時性に注目

★「中央ユーラシア」という視点：〈広域・多様〉な世界を、柔軟にとらえる

歴史学の本義②多様性を理解するに照らして、〈方法〉を検討

→各国史の問題点：国家という枠組みで捉えきれない多様なものが存在する！

…(a) 国家の境界にまたがるもの、(b) 国家の内部に存在するもの

(+国家という觀念自体も変化しており、一つの言葉で集約するのは、不都合) ①過去現在未来を知り、考えるに對する問題点

克服

(A) 重層的 (B) 可変的の枠組みの導入
→ 空間軸的体系にも親和性が高い

〈地域〉という枠組み
(A) 中で柔軟に捉える

「イメージ」
システムが重なりあっている(A)
どのよう注目するかの選択…(B)

◇中央ユーラシア Central Eurasia

: ユーラシア大陸 > 中央ユーラシア > 内陸アジア > 中央アジア (広義) > 中央アジア (旧ソ連領)
 = ユーラシア大陸から周縁の湿潤地域を除いた、乾燥を共通項とする巨大な歴史世界

モンゴルの気候の乾燥が原因

◎草原とオアシスの世界 …… 遊牧民とオアシス民の社会) → p4. 図 参照

〔北〕 シベリア

(森林地帯) 南シベリア～マンチュリア

(草原地帯) 大興安嶺～マンチュリア平原

モンゴリア: 北(外)モンゴル・南(内)モンゴル

ジュンガリア～イリ地方～セミレチエ

西北ユーラシア草原 (キプチャク草原) = カザフ草原～南ロシア草原

*ヴォルガ=ウラル地方

～ハンガリー平原

コーカサス (カフカース)

(オアシス地帯): 砂漠地域～農牧複合地帯 …… オアシス単位の農業・商工業と長距離商業
 河西回廊 (甘粛)

東トルキスタン: 「西域」～「新疆」

西トルキスタン: ソグド地方～マー=ワラー=アンナフル/トランスオクシアナ
 ホラーサーン

(高原/乾燥地域) チベット: アムド・カム・ウー・ツァン・ガリ

イラン: イラン=ザミーン/イラン=シャフル/イラク=アジャム

アゼルバイジャン

大アルメニア

《農牧接壌地帯》 農牧複合の展開と、異なる産品・文化の交換・交流

(湿潤農耕地帯) 北シナ: 渭水盆地～華北平原 …… 遊牧系政権の成立

〔南〕

アフガニスタン・イラン～ヒンドゥスタン平原

◎「中央ユーラシア」という用語：言葉に歴史あり！

中央ユーラシア Central Eurasia ≧ 内陸アジア Inner Asia, Innermost Asia, 中央アジア Central Asia

1940's サイナー (Denis Sinor 1916-2011, 匈→仏→米) が創案、講義などで使用

1954 (英) D. Sinor "Central Eurasia" in : D. Sinor (ed.), *Orientalism and History*

1963 (米) D. Sinor, *Introduction à l'étude de l'Eurasie Centrale* → Inner Asia にシフト

1965 (日) 山田信夫「中央ユーラシア史の構想」 (日) 1960 内陸アジア史学会

1990's 『中央ユーラシアの世界』(1990)・『中央ユーラシアの統合』(1997)

2000's 『中央ユーラシア史』(2000)・『中央ユーラシアを知る事典』(2005)

→範囲・定義・基準は？ ……方法的概念・研究概念 > 実体的・主観的地域設定

P. 4 P. 16 参照

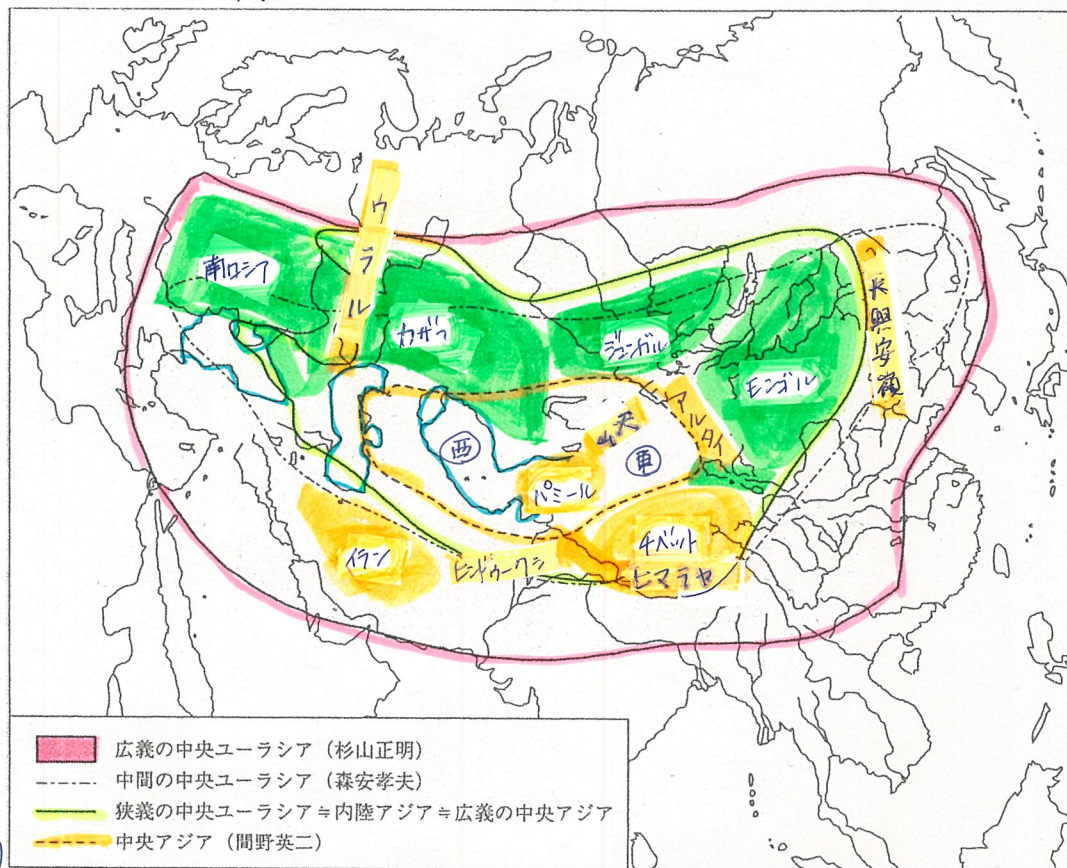


図 5-2 さまざまな中央ユーラシアの範囲 (杉山 2014)

定義は P. 16 参照

◇ユーラシア大陸の地理的・生態環境の特徴

◎東西のベルトと交流

①・東西の長大さ ↔ アフリカ大陸・南北アメリカ大陸：

：東西の均質性と南北の異質性＝「旗状地帯」

→東西方向の移動・拡散の容易さと、南北方向の交流・衝突の不可避＝歴史の動因

②・東南方の障壁と西方の開放性

：アルプス・ヒマラヤ造山帯による季節風の遮断と大西洋までの大低地帯(the Great Lowland)

⇒東北方を要とした扇状・旗状の地域の展開

東⇄西、西南⇄東北方向の移動・交流の展開

◎南北の環境の遷移と社会

・乾燥地域＝年間降水量 500 mm以下：200 mm以下＝砂漠地域

家畜：陸上交通

・半乾燥地域＝年間降水量 500～1000 mm

・湿潤地域＝年間降水量 1000 mm以上

…… 家畜／水上交通

→牧畜文明 ↔ 農耕文明 …… 動物エネルギーに依存 →近代＝化石エネルギーに

☆歴史の動因：①人の存在、②人とモノの移動、③軍事力、④情報伝達力

↳人口分布 ↳交通・交易 ↳騎射から火器へ ↳文字と通信

⇒焦点となる農牧接壌地帯～農牧複合地域：文明・社会の接点、交換・交流・活力・摩擦の核心

牧畜社会の優越：交通手段・軍事力の掌握＝広域・複合・普遍的な政治統合の継起

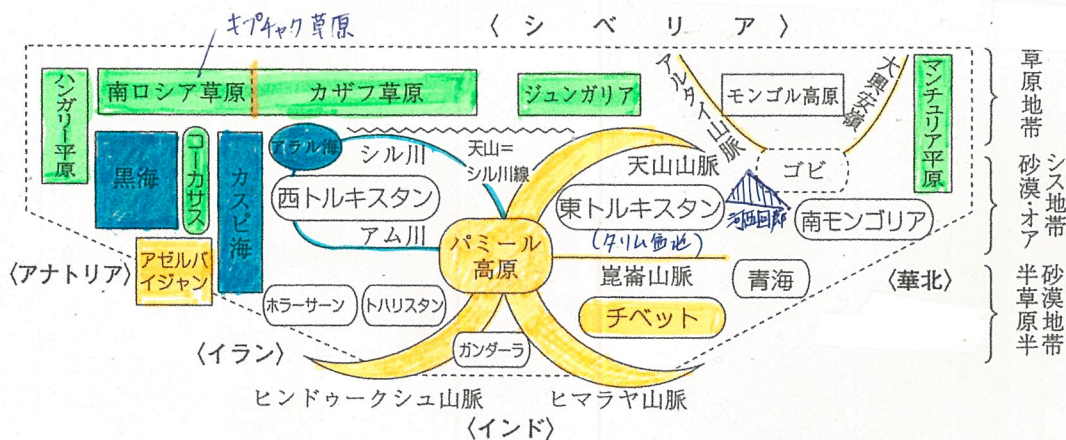
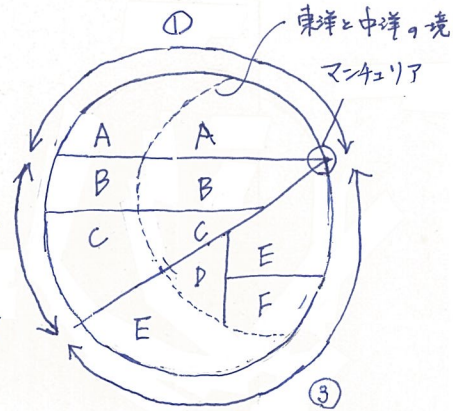


図 5-1 中央ユーラシアの概念図 (杉山)

2. 草原とオアシスの世界

◇「三つのアジア」(松田壽男)

- ①・**亜湿潤アジア** (Semi-Wet Asia) A: 森林狩猟型 = 毛皮貿易 < 森の道 = 毛皮の道 >
 ②・**乾燥アジア** (Dry Asia) B: **遊牧型** = 草原の遊牧民 < 草原の道 >
 C: **オアシス生活型** = オアシス / 隊商貿易 < オアシスの道 = 絹の道 >
 D: 山岳型
 ③・**湿潤アジア** (Wet Asia) E: **農耕型** (東アジア・南アジア) < 軽くて高価 >
 F: 海洋生活型 < 海への道 = 陶器の道 > < 重くて安価 >



⇒ 中央ユーラシア ≡ 内陸アジア ≡ 乾燥アジア

◇遊牧社会とオアシス社会

- ①・**遊牧** = 家畜群を管理・飼育しながら夏営地と冬営地を季節移動する生活形態
 (特徴) 移動性・集団性の高さ; 騎射 = 軍事力の優越 イル, ウルス, グルン ... 7 = (10ヶ国) の形成
 (弱点) 経済の脆弱性 ... 備蓄の難しさ → 政治的統合の必要性, いざという時は部下, 国人, 国衆
 ②・**オアシス** = 砂漠の中の可耕地とその広がり: 都市と農村
 (特徴) 高度な都市性 = 商業・工業・宗教
 (弱点) 孤立性; 自然環境への依存性 ... 人口密度低度 (これは上は増えない) → 富の蓄積
 ... 広域統合は難しい

◇遊牧民の社会組織・慣習

- ・親族組織: 父系出自に基礎 (← 異姓加入あり)
 ・婚姻: 外婚規制 逆縁婚 嫡庶の区別
 ・家産: 分割相続 末子相続
 ・家督: 嫡出男子間 実力主義 / 選挙制
 ・規範意識: 血統の上下重視 共有の観念
 ・信仰: 天(テングリ)の信仰 + シャマニズム ← 世界宗教の受容に寛容: 仏教 etc.

← 定住民との共存・分業: オアシス都市 / 農耕地域

例: 突厥とソグド人; 国際商人・都市商工民・近郊農民・農民

☆政治的まとめ = 遊牧国家 ~ 中央ユーラシア国家

: 騎馬軍力を擁する遊牧民の連合体が政治・軍事の主導権を握り、オアシス住民が経済・産業を、国際商人・宗教者が貿易・文化を担う

騎馬 + 弓箭 → 騎射 ... 開いた草原地帯では最強 (漢・東南アジアまで)

ハミとアグミの発明

① アマ ... 中央ユーラシア特産 (南部にはサリ ...) → 研究は東西冷戦終結まで進まず

② ヒツジ ... 自らで動く財産, 産肉・肉皮骨すべて利用

③ ヤギ ... ヒツジの主従性があり群れをリード (but 草を食べ過ぎる)

④ ウシ

⑤ ラクダ

+ イタ ... 木材・皮革



五畜

◇中央ユーラシア世界の主要集団

：トルコ系・モンゴル系遊牧民とイラン系定住民とを中心として、イラン・トルコ・チベット・ツングース系の農牧民があり、部族やオアシスをまとまりの単位として活動

*〇〇系：ふつう、国家なら支配集団、住民なら多数派の言語による分類、時に君主の血統

- | | | | | | |
|----------------|--------------|-------|--------------|---|--|
| ① ツングース系 | ：渤海・金・清 | 狩猟・農耕 | 満洲・ツングース語 | } ムンゴル系住民の居住地域も
中央ユーラシアの文化的な基盤も
……アルタイ系 | |
| ② モンゴル系 | ：契丹・モンゴル | 遊牧 | モンゴル語 | | |
| ③ トルコ系 | ：突厥・ウイグル | 遊牧 | トルコ (テュルク) 語 | | |
| ④ チベット系 | ：トプツト (吐蕃) | 遊牧・農耕 | チベット語 | ……シナ=チベット系 | |
| ⑤ イラン系 | ：ササン朝・サーマーン朝 | 遊牧/農耕 | ペルシア語 | ……インド=ヨーロッパ系 | |
| ⑥ アラブ系 | ：ウマイヤ朝 | 遊牧/農耕 | アラビア語 | ……アフロ=アジア系セム派 | |

⇒歴史的《中央ユーラシア世界》=④の遊牧社会と⑤のオアシス社会の相互関係が織りなす世界
：遊牧民の活動を主軸に、それら相互、およびそれらと定住社会との関係の下に展開

- ① 交流・提携=農産品・手工業製品⇄畜産品の交易；安全保障⇄外交・取引の提供
- ② 摩擦・衝突=遊牧民の侵入・掠奪；定住域政権への帰属

- (a) ・草原とオアシスの世界を核とし、その外側の世界と重なりあう周縁部をもつ“巨大な二重構造”
：周縁部は東アジア西北部・南アジア西北部・西アジア東北部・東ヨーロッパ東部と重なりあう
→焦点：農牧接壌地帯～農牧複合地域

ヨーロッパとアジアの同族
という理解は誤り

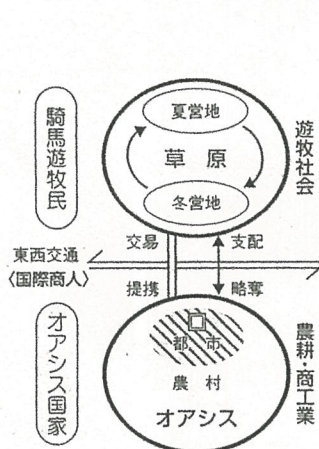
- (b) ・文化・生業・制度などあらゆる点における複合性 Cf.文字、世界宗教

- (c) ・傾向：ハード面=東→西の政治勢力の波動；ソフト面=西→東の文字・宗教・意匠等の伝播

西：先進地域

◎世界史理解における中央ユーラシアの意義

・シルクロード・起収騎馬民族・歴史の動因



▲③遊牧民とオアシス民の共生関係

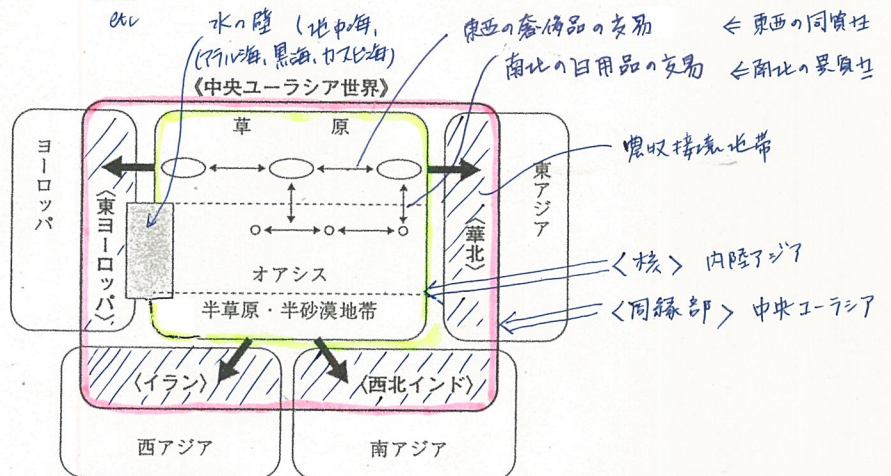


図5-4 中央ユーラシアのコア地域と“巨大な二重構造”

3. 遊牧国家とオアシス国家の登場

◇中央ユーラシア史の時期区分

- 3-(1) I 遊牧国家以前の時代 (～前 8/前 7C)
 II 遊牧国家の時代 (前 7～17-18C) …… 陸と騎射の時代
 (a) 初期遊牧国家の時代 (前 7～9C)
 3-(2) (b) トルコ化とイスラーム化 (9～12C) } 転換期 ①
 4 (c) モンゴル時代 (13-14C) = 中央ユーラシアの最高潮期
 (d) ポスト=モンゴル時代 (14-16C)
 5 (e) 近世帝国の時代 (16-18C) } 転換期 ②
 III 周縁化の時代 (17-18C～) …… 海と火器の時代
 → 遊牧勢力と定住農耕社会との力関係の逆転：中央ユーラシア世界の終焉

(1) 初期遊牧国家の時代

人類史の発祥：農業革命→都市国家の時代 ↔ 中央ユーラシア=人口稀薄
 1 乾燥により農業不可能、遊牧の開始で有効活用可能に

→ 前 1000 年紀

〈農耕地帯〉	〈乾燥地帯〉	〈草原地帯〉
領域国家	オアシス国家	騎馬遊牧民の出現：馬の家畜化
→ 古代帝国	(オアシス都市連合体)	; 騎乗技術 (馬具・金属器)

◇遊牧国家の形成：第一次軍事革命=陸と騎射の時代の開幕

備のあり方の異なる文化を形成する

・先スキタイ時代 (前 9～前 8C) …… スキタイ系文化 (→ 東伝?)

近年は逆とする説も。(農耕文化の発祥地、西が母国地)

西 [前 7～前 4C スキタイ：イラン系?]

☆史上最初の遊牧国家：遊牧王権を中心とした広域・複合的な政治連合体

- ・前 8C 南シベリア～モンゴル高原に形成 ギリシア系スキタイ人、農耕(い)、遊牧(い)、王族(い)
- ・前 7C～前 6C オリエン特侵入 → スキタイ-ペルシア戦役：ダレイオス 1 世=戦車 かきあがる
- ・前 5C～前 4C 南ロシア草原で全盛期 → 前 4 世紀にフェードアウト スキタイの南下はペルシア東部の興亡に関与? 騎馬に劣る

〔文化〕スキト=シベリア型文化：スキタイの三要素 「草原の古墳時代」

→ サルマタイ；アラン

① 鄭州マヤン ② 馬具 ③ 短剣

→ 集金

… イラン系遊牧民

東

[前3〜後2C 匈奴: トルコ・モンゴル系] 倭者
・前3C 月氏 (イラン系) ← 丁零など → 匈奴: 頭曼単于 ← 東胡 → 秦: 始皇帝
☆東方最初の遊牧帝国: 冒頓単于=帝国形成
※ 遊牧帝国が成立するのは優位の条件のみ → 漢の滅亡はここにはない

・前200 白登山の戦い=漢の属国化 ← 和親政策の存在が示す
・前129〜 漢武帝の反攻 → 両帝国の疲弊 武帝の対匈奴政策
→ 共存時代: 東西分裂 (前1C〜) → 南北分裂 (後1C) → 鮮卑の抬頭; 山西の南匈奴王国
cf. イギリスのインド支配

◎遊牧国家の基本型確立: 中核の遊牧部族連合; オアシス地帯の掌握; 農耕国家の貢納
匈奴の歴史的影響: 北方草原地帯 軍事組織と社会組織が一様 → 帝国の維持
匈奴の歴史的影響: 匈奴の歴史的影響: 匈奴の歴史的影響

《初期遊牧国家》
①遊牧軍事集団を中核とする政治連合体 ... 封建的要素の軍政治・社会
②北方の遊牧民 (軍事) と南方の定住民 (経済) の共存関係が軸
③在来の部族を温存させたまま従属・連合した部族連合国家 ... 日本・幕藩体制

☆東→西の波動: 東方からの新来者による政治勢力の組み替え・交代
例: 鮮卑の居住地は大漠南縁
たいていの三大所割体制
分制の権力
→ 結果はゆるみと内部崩壊

《オアシス国家》
ソグディアナ (ソグド地方): ソグド人
オアシス都市国家の連合体: 盟主サマルカンド 「ソグドの王にしてサマルカンドの領主」
商業貴族が支配

モロの伝説・商業ネットワーク: 本国を中心に、草原の道・オアシスの道に商業拠点・コロニーを展開
情報の伝達・ソグド語: インド=ヨーロッパ系=シルクロードの国際語; ソグド文字 ... 互換書簡
→ 6〜8C 隆盛 ... → 8C〜 イスラム勢力の侵入 → イラン系ムスリム人がソグドの商業語を継承

タリム盆地 “西域三十六国”: クチャ (亀茲)・カラシャール (焉耆)・トウルファン (高昌)・
ホータン (于闐)・カシュガル (疏勒)・ヤルカンド (沙車) ...
万国條約で
④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

◎オアシス都市国家が並立: 北の遊牧国家と東の中華王朝との間で外交・貿易
オアシス都市国家を帝国の主要な財源とする → 商業活動の保護、代官を派遣し間接支配

☆シルクロード貿易: 東 絹織物・紙・茶・陶器 etc.
西 金銀器・ガラス製品・乳香・薬品・絨毯 etc.
中 玉・宝石・麝香 etc.
北 毛皮・朝鮮人参 etc.
南 香木・香辛料・宝石・珊瑚・象牙・犀角・鼈甲 etc.
+ 奴隷・家畜

: 商人集団=アラム、インド、ソグド、ペルシア、アルメニア、ユダヤ、アラブ、ウイグル etc.
軽くて高価な奢侈品

8

3. 遊牧国家とオアシス国家の登場

(1) 初期遊牧国家の時代 (承前)

西 《西方遊牧国家》

- ・東方からの新勢力到来にともなう権力交代・再編の繰り返し → モンゴル帝国へ
- ・トルコ・モンゴルの特徴: カガン号、天信仰 ← イラン系・ウラル系との混雑/スラブ化
→ 定住・農耕化; 商業の繁栄

[4~5C **フン**: トルコ・モンゴル系] *^{Hun...音讀と一致(あてなないバ)}匈奴?

- ・4C中 南ロシア草原に進出 → 375? 東ゴート撃破: ゲルマン人大移動へ
- ・5C中 アッティラ: ハンガリー平原に帝国形成

《ドナウ河流域》

[6~8C **アヴァール**] *柔然?

- ・7C ハンガリー平原進出
↓
vs カール大帝 (→ 崩壊)

[7C~ **ブルガリア**] ← ^(イ)

→ スラブ化: 9C キリスト教受容
ギリシア正教 ユーグレイト vs ホルム (野北)

[9~10C **マジャール**: ウラル系]

→ 10C末 ハンガリー王国
キリスト教受容

《南ロシア草原》

[4~7C **ブルガル**: トルコ系]

[6~10C **ハザル**: トルコ系] 突厥文字の使用

- ・7C中 **西突厥**より自立: 二重王権=カガン>ベク (執権)

・8C前 ビザンツと友好: アラブと対立) ^(イスラム) 西欧に於いてイスラームの隆盛

→ ユダヤ教受容 → 965 キエフルーシにより崩壊

↓ ^(キエフ大公国) ユダヤ人と結び

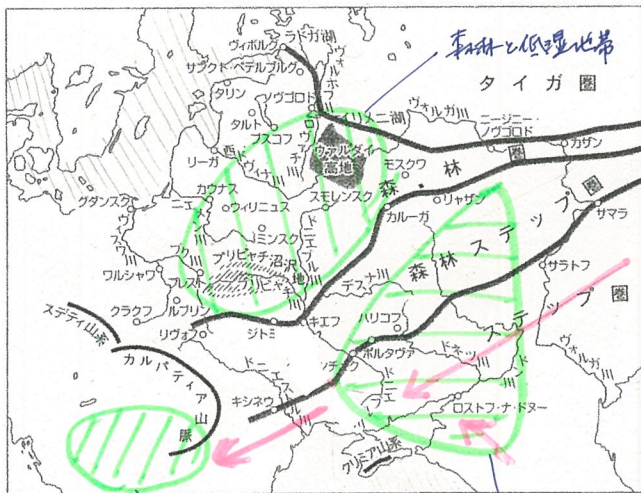
[10~13C ペチェネグ=ポロヴェツ (キプチャク)]

[10~13C **ヴォルガ=ブルガル**] ^(モスクワ=ウラル) 現在、ロシア領内のイスラーム勢力

・10Cまでにイスラーム受容 → 13C モンゴル支配

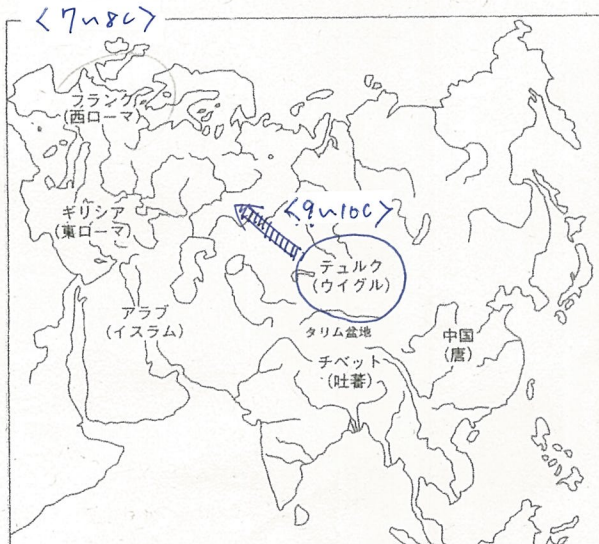
...タタールへ

恒常的な東方遊牧勢力の圧迫 → 中世西欧の封建社会形成



ドナウ河流域
= 102127

南ロシア草原



世界史の主要舞台が、この時点で出揃っている。

3. 遊牧国家とオアシス国家の登場

(2) トルコ化とイスラーム化

★9C中～10C初：チベット・ウイグル・唐三帝国の解体・再編期

- ①政治秩序の解体・再編：大統合の消失と地域・民族的まとまりの顕在化
- ②普遍志向に代る固有文化の錬成：民族文字の簇生 cf. 日本の中世時代
- ③トルコ化の始まり ← トルコ系諸集団の西方展開

◇9～10C：中央ユーラシア史の一大劃期

- ①遊牧民の定住化の開始：遊牧者がオアシスや定住農耕地帯に移住して、直接交易を行うこと。X 農耕民化
- ②トルコ化とイスラーム化
 - ③「征服王朝」の時代：中央ユーラシア型国家 森安孝夫 2007

①《東方遊牧国家の定住化》

755-763 安史の乱：トルコ・ソグド系軍団

- ・840 ウイグル帝国の崩壊；チベット帝国の衰退；907 唐の滅亡
- 923-960 シャタ＝テュルク国家：後唐・後晋・後漢・後周 (五代十国)
- 華北のトルコ系・ソグド系遊牧武人政権

[9～11C 河西ウイグル王国 (甘州回鶻)] → 西夏

・[9～14C 西ウイグル王国 (天山ウイグル、西州回鶻)] → 西遼 → モンゴル帝国

・遊牧トルコ系支配集団とオアシス・イラン系在地社会の二重構造 → 東トルキスタンの「トルコ化」

・文書・印鑑による都市型契約社会：ウイグル文字文化 マニ教・ウイグル仏教・キリスト教

・[982-1227 西夏 (大夏)：チベット系タンгут人]

・西夏文字 仏教文化 東西交易 (中世交易)

→ 13C 初 西夏：チンギス・カンの大征伐で滅亡 (西ウイグル) 服従 → ウイグル人の支配層進出

・[916-1125 キタイ (キタン) 帝国 (遼・大契丹国)：モンゴル系キタイ (キタン) 人]：耶律阿保機

・皇帝 / カガン号 キタイ文字 仏教文化 ← 唐文化の継承

・二重統治：遊牧キタイ人 / 農耕漢人・渤海人 遊牧権力と拠点都市の複合：五京制

→ 1125 金により滅亡 = 金軍に編入；西走 → [1132-1212 西遼 / カラ＝キタイ]：耶律大石 → モンゴル帝国

・ウイグルなどを支配下におく仏教王国 → チャロタイ＝ハン国

↑ ……モンゴル高原の主導権争い



13C 初、西夏、金、南宋もモンゴル帝国に滅亡

↓ (マンチュリア)

1115-1234 金 (大女真金国) : ツングース系 **ジュシェン人** (女真・女直) : アグダ (完顔阿骨打)

- ・二重統治: ジュシェン部族 = **猛安・謀克** キタイ軍勢力、編入 → 華北に対する軍事的優位
 - ・**ジュシェン文字** (女直字) 仏教・道教 “三教兼通” → 女真とキタイの連合政権の模範
- 1211-17 チンギス=カンの遠征で大打撃、1234 滅亡

② 《トルコ化とイスラーム化》

(中央アジア西部) オアシス住民 = コーカソイド/イラン系; 遊牧民 = モンゴロイド/アルタイ系
(中央アジア東部) オアシス住民 = コーカソイド/イラン系 * アラム文字・アラム語

- ・バクトリア ~ 大月氏 ~ クシャーン朝 ~ エフタル / ソグディアナ・タリム盆地オアシス
- ・イラン系の基層 + ギリシア化 (ヘレニズム) + 遊牧勢力の南下 / 中華王朝勢力の西進

↓

◇ 7-8C ~ : イスラーム勢力の中央アジア進出 = **イスラーム化** の開始 (西 → 東)

◇ 9-10C ~ : トルコ系遊牧集団の南下・西進 = **トルコ化** の開始 (東 → 西)

(中央アジア西部) **迅速** なイスラーム化
(西トルコ系)

近世ペルシア語の成立と **緩慢** なトルコ化 = 873-999 **サーマーン朝** : イラン系 → イスラーム文化

(中央アジア東部) 諸宗教の併存と **緩慢** なイスラーム化
(東トルコ系)

= 9 ~ 11C **カラ=ハン朝** : トルコ系 (→ トルク=イスラーム文化)

迅速 ・徹底的なトルコ化

= 西ウイグル王国

→ 11C にはほぼトルコ化 ↔ イスラーム化の完了は 16C

→ **トルキスタンの成立**

⇒ **トルコ・イスラーム時代** の開幕

◎ トルコ系軍人・王権の西方進出

・奴隸軍人 = **グラーム**、**マムルーク** : 養成と流通のシステム

・イスラームのトルコ時代 : **ガズナ朝**・**セルジューク朝**・**ホラズム朝**...

* 奴隸軍人制度と遊牧的伝統 : 騎射戦士の精強さ (← 自由民戦士の誇り)

、海軍はどうか? 海軍はなかった

③ 《中央ユーラシア型国家 (征服王朝)》

☆ 遊牧系勢力が、**本拠地**と**固有の軍事力**を維持したまま、大人口を抱える**南方**の都市・農耕地帯を、**少ない人口**で**安定的**に支配する国家形態

: キタイ帝国、シャダ=テュルク国家、西夏、西ウイグル王国、カラ=ハン朝、セルジューク朝...

・ **国家運営のノウハウ**の蓄積 : **税制**、**住民管理制度**、**文書行政制度**、**文字文化**、**人材登用制度**、**交通・通信制度**、**通貨・金融政策**、**商業ネットワーク**、**都市建設**

→ モンゴル帝国の大発展を準備 : キタイ人・ウイグル人・イラン系ムスリム

中央ユーラシア型国家の最終展開

貢納 (と服従) を要求する。在地社会の手付けはない

... 国家内の多様な集団の言語・慣習・宗教に寛容

住民の集団で把握し、代表者を選んで統治 (低コストの支配)

4. モンゴル時代の大統合

◇13~14C **モンゴル時代** the Mongol Period : 中央ユーラシア史の最高潮期

①中央ユーラシア型国家の最発展形：遊牧型・定住型国家の融合と、その下での社会の多様性

(A)〈遊牧権力〉君主権力・王統の至尊化、遊牧部族の再編・分配 …… **ウルス** トゥメン・千人隊

(B)〈広域支配〉徴税・通貨・住民把握・人材登用・文書行政・情報伝達・多言語併用・宗教寛容

②ユーラシアの**大統合**の時代：陸海の交通網；世界規模の**銀流通**（補助として紙幣）

・9C ウイグル解体・西遷

←キタイ帝国の高原支配

→12C 後半 モンゴル系諸族の高原進出

←西遼と金の勢力争い：金の分割統治策

[1206~14C **モンゴル帝国** (yoke mongyul ulus, 大蒙古国)]

①**チンギス=カン** (位 1206-27) : テムジン、モンゴル部キヤト氏族 **ボルジギン氏** = 黄金氏族

〈内政〉一族分封→左・中・右ウルスの形成；**モンゴル文字**創製

〈外征〉東：金遠征=華北経略：ジャライル国王ムカリ …… 金の支配からの自立

西：中央アジア~イラン・ロシア遠征 …… カラ=キタイ(タイマン)、ボラ=ギル朝の滅亡、西ウイグルの従属

◇帝国の基本原則：中央ユーラシア型国家の最発展形。

⇒オアシス都市の手工業者、商人の強制移住

◎共同領有=①血縁・**血統主義**：創業者チンギス家の絶対性→一族・功臣家系の既得権尊重

②分有支配：一族分封制=**ウルス**

；遠征参加の義務と権利 → 権益地の設定

③選挙制：**クリルタイ**

遠征は利益が大きく、勝利は参加者も！
各千人隊に均等に兵員を抽出、軍団を組織 → 権益の均分
※モンゴルの日本遠征はこの利権を求めていない（権力ではない）

◎継承原則=①君主位：クリルタイでの選挙・推戴

②血統主義：母系の出自を重視

③末子相続 → 末子の地位の特殊性：オッチギン

（家長（父権））

◎統治技術=西ウイグル・キタイ・イラン系ムスリムのノウハウを継承

オアシス都市の支配、二元支配

沿河沿路帝国運営

遊牧民 ◇ 支配の基幹構造：1206-11 成立

(B)

→ 安定的な広域支配の実現

(A)

君主権力の強化（王統の至尊化）

（中央集権的な遊牧民支配）

①**千人隊制**：十進法組織；在来部族の解体・再編 → 95の千人隊（→129）

②**左右翼制**：左・中・右体制：左翼（チンギスの兄弟）、中央（チンギスの直轄）、右翼 …… 中央が圧倒的に強い、「外戚専断」の不在

③**ケシク制**：親衛隊=宿衛1000、箭筒士1000、侍衛8000 …… 有封被支配部族の子弟を中心に汗の直属軍を編成

④**王統**：**チンギス統原理** …… チンギスの血統にのみ継承

→ 人質の意味があり、子飼化。（奴隷出身者含む）

↓〈監国〉トルイ …… 継承を固める

②**オゴデイ=カン** (位 1229-41)：**カアン**号

オゴデイが自身の専断して、可汗号を継承（モンゴル以降、君号として継承）

〈内政〉「首都」**カラコルム**造営

→ 定住民便即の応接、物資の貯蔵を目的。（君主は遊牧を続ける）

モンゴル帝国の
歴史的意義

〔外征〕 東：金遠征 → 南宋・高麗遠征 / キョウヤク草原
西：バトゥの西征 → ジョチ=ウルス形成

華北、中央アジア、イランに分割

分割相模の基盤の趣味的

◇二重構造= ガラコルム政府が全土の行政を統括 ← 各王家が全土に權益を保持 } → モンク構造

行旅の総督 ジャルグチ・ビチクチ etc. (多) (書記)

征服地に權益地設定：ダルガチ (監督官)

華北・中央アジア・イラン総督府；タンマチ軍 * ジャムチ= 駅伝制の整備

相模が全土に回復されているか監視

③ グユク=カン (位 1246-48) : ジョチ家・トルイ家と対立
オゴデイの長子 (バトゥ) (モンケ)

④ モンケ=カン (位 1251-59) : 帝位、トルイ家に移動

〔外征〕 東：クビライの南宋遠征 → 自ら出陣、病歿

西：フレグの西征 → フレグ=ウルス形成

↓ モンケの弟

華北を抑え、モンゴルを兵糧めめ

⑤ クビライ=カン (位 1260-94, 世祖) ← 帝位継承戦争 → (5) アリク=ブケ (位 1260-64)

→ 〔左翼〕= 東方勢力の支持で勝利：帝国の多元化、各地の移動 → 直屬ウルスの大元が成立

モンケの長子、アリク=ブケが継承を宣言

だが継承の原理は実力主義！

明清が継承

↓ 地名の無関係な王朝号は初。

〔1271-1368 大元ウルス (dai-ön yeke mongyul ulus, 大元大蒙古国)〕 大元は「易経」・大哉乾元に由来、大元いという意味は正しい (大正と同じ)

◇ 大元カアンを中心とする一族諸ウルスの重層・連合：大カアン (世祖) × 分裂 ... 帝国内も組織付けられたネットワークとして 組織化

〔内政〕 大都建設= 遊牧・漠地の境界上の政治・経済・文化基地 ≠ 軍事

チベット仏教導入= 帝師パクパ：パクパ文字創製

① 全国統一の場のないバトゥの即位、② 帝国の広域化、

〔外征〕 海域世界進出：1276 南宋接収 → 1280's ~ 日本・東南アジア服属勧誘/遠征 } 陸海ルートに依るアジア世界交通網の創出

← 1280's-1304 カイドウの乱= 中央アジア → チャガタイ=ウルス形成

1287-92 ナヤンの乱= マンチュリア

一極でガガガしている
分裂とはではない。

◇ 大元ウルス：大カアンの直屬ウルス= クビライ王朝

① 左翼勢力に基盤 : 東方三王家・五投下：ジャライル・コンギラト・イキレス・ウルウト・マンガト ... 有能な臣の氏族

→ 右翼= 非主流派：アリク=ブケ家・オゴデイ家 + オイラト

② コンギラト時代 : 姻族コンギラト閥による政権運営 ... 歴代皇后の出身氏族

③ ウルスの重層構造：クビライ家の分封= 中央・西方・北方 + チベット・雲南・江南

；各王家・功臣權益地のモザイク構造 ... 南宋の旧領も各王家に權益を分配

④ 属人主義的支配 : 集団主義= 人間を集団単位で把握し、間接支配 ... 戸籍の作成をしない！

；「根脚」= モンゴル朝廷との関係の古さ・深さによる差等 → モンゴル > 色目 > 漢 > 南人

... 帝国に帰属した早さの順に過ぎない。

手帳をあげれば 根脚あり

→ 差別ではない！

↓ 14C : 中央権力の弱体化と世界的災害の時代

・ 1328 天曆の内乱 ~ : 新興軍閥の実権掌握= キプチャク・アス・カンクリ軍団

→ 帝国の弱体化：(1) 選挙制による継承の不安定、(2) 分封制による所領の細分化 + 災害の多発

← 1351-1366 紅巾の乱 → 1368 大明の成立：南京

後のナショナリズムによるフィクション

⇒ 1368 皇帝トゴン=テムル、大都放棄

× 漢民族王朝の復活 〇漢字の復活

むしろ大明は元元のリズムを

→ 北遷 [1368 (~1388) ~1636 : 北元 (大元ウルス)] → 1388 クビライ家断絶；大ハーンの存続

正統に継承

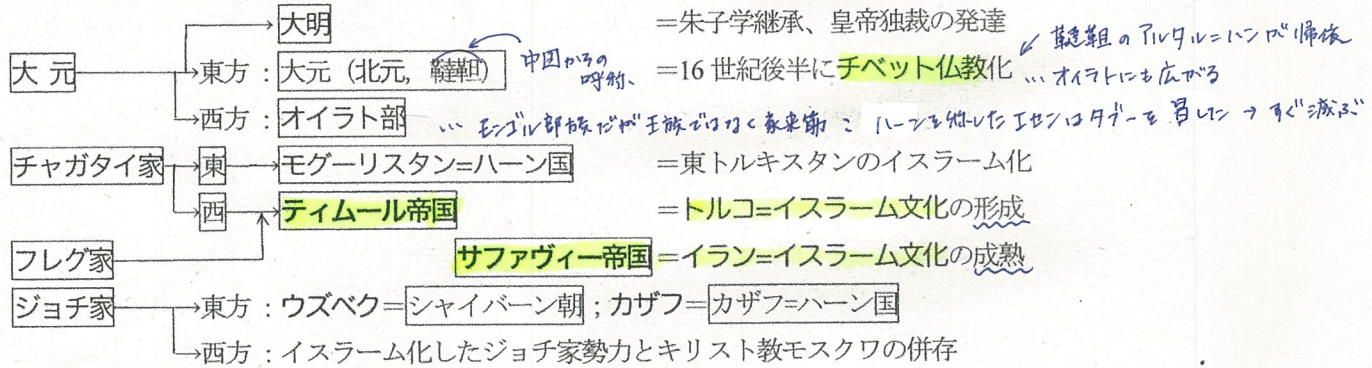
↓ 派対ではない。インドを組織したイギリス状態

5. 中央ユーラシアの成熟と「周縁化」

(1) ポスト=モンゴル時代のユーラシア情勢

◇14-15世紀：ポスト=モンゴル時代=モンゴル諸政権の「衣更え」

- ①全体統合から地域への重心の移行 *分断ではない (⇔ 13-14c: 大統合の時代)
- ②モンゴル系勢力の「在地化」: イスラーム化・トルコ化・イラン化・中国化 etc.
- ③モンゴル時代の遺産=広域支配の継承・再編: 領域、支配集団の系譜、統治技術など
⇒ 各地域における言語・宗教・文化の組合せの成立



見やすい世界地図

(2) 中央ユーラシアの変貌と再編

◇16-17C 中央ユーラシアの転換期 1 簡略したオスマン帝国を除外し、現在の世界の疆域

- ①「帝国の時代」= 地域的世界帝国の並立状況 *イスラーム・チベット仏教
: ロシア帝国・オスマン帝国・サファヴィー帝国・ムガル帝国・ジュンガル帝国・大清帝国
- ②モンゴル=チベット仏教世界の形成 (東) (西) トルコ=イスラーム世界] ← 世界の宗教分布の確立
... パミール高原を境に東西が二分
- ③「海と火器の時代」の開幕: ヨーロッパの海上進出

↓
 ◇18-19C 大清と(ロシア)による内陸分割: 18C 中 ジュンガル征服; 19C 中 ウズベク征服
 (新興: ロシアが中央アジアを結び新たな貿易路 → 海へ時代に入り、ロシアは衰退してしまっている)

⇒ 中央ユーラシアの「周縁化」: ①軍事的優位の喪失、②農耕民の進出による「少数民族」化

(a) 中央ユーラシアの「辺境化」= 火器と人口圧

- ・政治面: 軍事的優位の喪失 = 軍事・交通技術の劣勢化
- ・社会面: 人口の少なさ = 農耕民の進出による「少数民族」化

(b) 19世紀における力関係の逆転: ①軍事力=ヨーロッパの産業革命・軍事技術革新

②人口圧=定住民社会の人口爆発と拡大: 漢人

◎「帝国」から「国民国家」へ

: 多面的な君主による多元・複合的支配から、「一つの国土に一つの国民」というフィクションへ

- ・帝国 : ①軍事集団による権力樹立、②定住民社会の利用・共存 ← 中国王朝さえ、その一類型
- ・国民国家: タテ=上下の一体性を武器とする代り、ヨコの多民族・多言語・多宗教共存に不寛容
: “少数精鋭” の時代から「人口は国力」の時代へ

→ユーラシア諸帝国の「在地化」 : 清の「中国」化 ; オスマン朝の「トルコ」化
支配集団の「少数民族」化・同化 : マンジュ人の「漢化」

↓

; インド=ムスリムの主導権喪失

↓ 土地に對する所有の概念の欠如 → 「無主の地」として利用

◇19-20C 初 列強による角逐・分割 : 歴史的「中央ユーラシア世界」の消滅

- ・ロシアの南下 vs イギリスの北上 : イラン〜アフガニスタン〜チベット
 - ・東ユーラシアの分割 : ロシア=外モンゴル・シベリア / 日本=満洲・内モンゴル
- 20C 中 日本の撤退 / 中国の東トルキスタン・チベット進出

↓

◇20-21C ユーラシア分割の構図 : 清→中華民国→中華人民共和国

; ロシア帝国→ソビエト連邦→ロシア・CIS

⇒1990s〜 中央ユーラシアの再編へ=草刈り場となる西トルキスタン、モンゴル・チベットの動き

: 1991 ソ連滅亡; 2001.9.11 米中枢同時テロ→対テロ戦争=アメリカの進出とロシアの対抗

→中国の擡頭 : 上海協力機構(SCO, 2001-) ; 「一帯一路」構想(2013-) ↔ 米の対抗と日印の動向

ふたたび「中央ユーラシア」とは——歴史世界としての中央ユーラシア → < p 2 >

◇「中央ユーラシア Central Eurasia, Eurasie Centrale」の範囲と定義

(a) ①広義の中央ユーラシア(a) : サイナー「内陸アジア」、杉山正明 …… 松田壽男「乾燥アジア」

: ユーラシア内陸部の乾燥域全体 ← ツンドラ地帯 / 西アジアへの広がり度で分岐

(b) ②広義の中央ユーラシア(b) : 岡田英弘、森安孝夫 ≡ 「内陸アジア」

: < 草原地帯—砂漠地帯—半草原半砂漠地帯 > の三重構造

(c) ③狭義の中央ユーラシア : 小松久男 ≡ 欧米「内陸アジア」・「(大)中央アジア」

: < 草原とオアシス > + イスラーム etc. → トルコ=イスラーム世界 : 実体的・本質的定義

(d) > 中央アジア : (a) 広義 = (大) 中央アジア ≡ ^{ツェントラルアジエン} 中央アジア Zentralasien

> 中央アジア = 東西トルキスタンとその周辺

(b) 狭義 = 東西トルキスタンのオアシス地帯 * ^{ツェントラルアジエン} 中央アジア Центральная Азия

> 西トルキスタン = 旧ソ連領中央アジア : ^{スレードニキヤアジヤ} 中部アジア Средняя Азия

* 分野による相違 : 前近代史 / 近現代史、歴史学・考古学・美術史・言語学 / 政治学・経済学

⇒歴史世界としての中央ユーラシア : 草原地帯の遊牧社会と砂漠地帯のオアシス社会の相互関係を軸としつつ、その周縁の乾燥地域と重なり合う世界

国民国家の海理に
遊牧民のメニエール